

# 「今昔物語」から「枕草子」へ

瀬戸山ひろ

「今昔物語集」の登場人物は実に多彩です。天皇から庶民、乞食に至っています。その中に「そういえば、昔歴史で習ったこんな人がいたっけ。」とか、「おや、こんな人のことも出てる。」等、思いがけない人がいます。最近読んだ23巻では清少納言の夫だったという人に出くわしました。橘則光です。何と彼は若かりし時、殺人事件を起こしているのです。

「今昔物語集」によると、彼は兵の家の出身ではないのに、肝っ玉が太くて思慮があり力持ち、しかも容貌なども良かったとあります。従って出世もし、周囲から一目おかれていたというのです。さすが才女・清少納言の見込んだ人だけある、と思ったら大間違いで、清少納言はこの則光との間に男の子まで作りながら、早々と離婚しています。また清少納言は、彼のことを「あの謎が分からない男なんて気に入らないわ。（にくし）」（『里にまかでたるに』・枕草子88段）とハッキリ非難しているのです。

この二人はその昔、どのようにして出会ったのでしょうか？ 別れた後、宮中で再会した時の気持ちはどんなだったでしょう？ 離婚した後も公然と交際していた様子ですが、一体どういう関係だったのでしょうか？ 週刊誌的な興味もあって二人のことを調べてみることにしました。

しかし、二人の年齢やら時間的経過がごちゃごちゃして、どうもよく分かりません。壇上先生が「芭蕉の講座」の中で「年表を作ってみると発見がある」と言われたことを思い出し、ひとまず二人を対応させた年表を作ってみました。資料としたのは主に小学館の古典文学全集「枕草子」「今昔物語集」です。始めたばかりの「インターネット」でも検索してみました。やっとできあがったのが文末の表です。この表は、清少納言が966年に生まれたという一つの説に従ってまとめたので、決して学術的な裏付けがあるものではありません。念のため。

この表を眺みながら二人の青春と朱夏の時代を想像してみますと・・・。

まず、豪傑・橘則光と、才女・清少納言はいつ何処で知り合ったのでしょうか。二人の結婚年齢を調べると、則光が16才、清少納言は15才です。今では若過ぎる結婚ですが、当時はこのくらいが普通だったでしょう。ただ当時流行の自由恋愛ではなくて、親の進めた結婚かと想像します。結婚の時期が、父の任国、周防から帰って間がないことがその理由です。橘家は敏達天皇を祖とする名家、奈良時代には例の橘の諸兄を出している文化系の家系です。父の敏政は ちゅうぐわうのすけ 中宮亮 で、今は中流の貴族となっています。対して清少納言の祖先は天武天皇ではあるが、父の元輔も受領階級で、同じ中流貴族です。親同士にとって、釣り合いのとれる安定した縁組みだったように想像しました。結婚して次の年には長男（則長）が誕生。以後しばらくは不明ですが、20才までには則長を置いて則光と離婚したのではないかということです。

離婚の原因は何か？先に述べたように、則光は「思慮分別」「体力」おまけに「見目」も良かった・・・申し分ない男性のように思われますが、残るは「教養」「価値観」ということになるのでしょうか。おおかたの研究者の間でも離婚の原因をこのあたりにもっていつているようです。若いときの則光について資料を探すことができなかったのですが、私の勝手な想像によると、「教養」の中で、則光が清少納言に格別劣っていたのは「漢詩文」の教養ではなかったでしょうか？ 当時漢詩文は男子の特権文化で、女子にはほとんど無知の世界のはずでした。それなのに清少納言は実に漢詩文の世界に長じています。『香炉峰の雪』（95段）しかり、頭中将 ただのぶ 齊信とのトラブル解決事件しかり（『草の庵』事件86段）。「枕草子」の中で清少納言は男性相手に漢詩や漢文に関して丁々発止とやり合います。周囲の男性陣が誰もかなわないほどの知識を持っていたようなのです。知識が単に豊富というのではなく、いわゆる頭の回転の速い女性です。話相手の言わんとする漢詩文の世界を理解し、タイミング良く返答できる女性です。

一方、則光には石頭的なところがあって、頓知とかウイットとかいうものが欠けていたようです。清少納言が中宮との不和で、一年間程里下がりをしていたとき、宮中の男性たちが則光に、清少納言の居場所を聞き出そうとする場面があります。困った則光は目の前にあった海藻をむしゃむしゃ食べてごまかしたよ、と告げに来ます。と

てもワイルドです。清少納言だったら頼知を利かせて、しゃれた歌か何かで取り繕うでしょうに。しかもこの後、則光が「あなたの居所を教えてもいいですか？」と手紙をよこしたので、その返事に「海藻」を包んで送ると、則光には何のことが、ちんぷんかんぷん。???・・・そこで清少納言がヒントになる和歌を書いて差し出したところ、「わあー、和歌なんて駄目ですよ、こらえてください・・・」とばかり逃げてしまう。則光が和歌が苦手だったという有名な場面です。則光の口癖は「私に歌を寄こしたらその人を仇敵としますよ。」とか「歌をやりとりするのは絶交する時です。」で、余程文学嫌いだったようですね。まあこれは、国語よりも体育のほうが好きだったということです。私にはとても正直な人のように思えるのですが、こんな男だから、知に優れた清少納言が彼を物足りないと感じたのは無理もないでしょう。二人が宮中で会話をするときの様子からも、則光のほうが下手に出て、清少納言のご機嫌をとっている雰囲気です。別れた妻の優秀さを自慢したい・・・則光なりの尊敬がそういう態度をとらせたのでしょうか？裏のない、気のいい人だったと思います。ただ清少納言の好みは貴族らしい貴族。ああいえばこうとすぐ反応が返って来る、知的な会話ができる人（例えば藤原齊信とか、藤原行成とかの貴公子）だったに違いないから、うまくいなくて当然だったでしょうね。

さて、離婚後彼女が20才の時、頼みの父は肥後国へ赴任し、しかも24才の頃、この父は任地で死亡してしまいました。庇護者を失った女が、生きる為に才気を生かして宮仕えを始めるのは自然の成り行きだったでしょう。27、8才で中宮定子の元に出仕しています。この後二人は宮中で再会、4、5年間は交際が復活したようです。宮仕えを始めた彼女は、頭の中將藤原齊信ただのぶ（道長側の人間、彼との絡みで一時期、定子とうまくいかなかったらしい）と親交を結び、その部下である則光ともしげしげと会っていたようです。このあたりは「枕草子」86段に詳しく書かれています。殿上人からも「兄妹（いもうと せうと）のなか」とまで呼ばれています。価値観の違いで離婚したものの、心から憎み合って別れたのではなかったようですね。ほっとします。

橘則光の殺人事件はこの交際中に起こりましたが、「枕草子」には事件については全く触れていません。則光自身、息子たちにこの事件の真相を語ったのはかなり

老齢になってからなので、清少納言が知らないのは当然です。この時清少納言は30才位、前に述べた里下がりをしていた頃にあたります。

997年、則光は「さえもん左衛門尉の蔵人」で31、2才の男盛りですが、この殺人事件は彼が望んで引き起こしたわけではありませんでした。

「今昔物語集」によると、宮中の宿直をさぼって恋人の家に忍んで行く途中、暗闇の中で数人の強盗に遭い、やむなく3人を次々に斬り殺したのです。つまり正当防衛なのですが、その殺しに至る様子が実に生き生きと書いてあります。面白いのは則光が正面から強盗と切り合ったのではない点です。一人目は暗闇の中で「このままでは頭を打ち割られてしまう」と急に脇に飛び退いたところ、相手は急には止まれず、自分の前に出てきたので、太刀で相手の頭を断ち割りました。二人目は「前のようにはいかないぞ」と屈んだ所へ、相手がけつまずいて倒れたので、これまた頭を断ち切ったのでした。三人目は「もう駄目だ、神様、仏様助けて」と走って来るものの方向に、鉾でも持つようにして太刀を向けたところ、相手がぶつかってきておなかにぶすり・・という具合。緊迫感のある筆致で、テンポ良く描ききっています。確かに運が良かったことかもしれませんが、なんといっても彼のとっさの判断力がものをいったのです。冷静沈着の証拠に三人を殺した後、こどねりわらわ小舎人童に着替えを持ってこさせ、刀を洗って血を落とし、口止めをして、そしらぬ顔で宿舎に帰っていくのです。(内心はびくびくしながらも・・)ここまでが前半。後半は翌日、自分のしわざと露見するのを恐れつつ現場に行くと、荒くれ男がこの賊を切ったのは自分だのご自慢中、それを見て「あ～良かった、自分の仕業とばれなくて・・」とホッ、やっと顔を上げることが出来たというのです。前半の緊迫感とは対照的に笑いをもって描かれています。ここに出てくる則光は、気が小さいのではなく、面倒なことに巻き込まれたくない人柄のようです。強盗を懲らしめたという名誉より、平穩を好む可愛い人柄です。宮中の宿直をさぼって女の所へ行こうとしていたのがばれても困るのでしょう。清少納言なら平穩よりはドラマチックな名誉を選んだでしょうね。

翌998年、則光はとあとうみ遠江介(国司の次官)になって地方へ下り、二人の縁は切れました。「さて、かうぶり得て、とほたあふみの介などいひしかば、にくくしてこそやみしか。」(それから則光は5位になって、遠江の介などいったので、気に入らな

い気持ちでそのままになってしまった。「枕草子」)と最後が結ばれていますが、この文章の雰囲気は、すれ違いのまま、理解し合えぬまま、因縁深い人と会えなくなった寂しさが滲んでいるように感じます。この後則光は順調に出世、最後は陸奥の国司となり63才頃亡くなっています。三人の男児に囲まれて。清少納言のほうは定子亡き後、35才で宮仕えを止め、受領階級の貴族と再婚、女兒をもうけたとか、本当なら高齡出産ですが・・・晩年は京都の東山あたりでひっそりと亡くなったようです。

「今昔物語集」と「枕草子」・・・同じ平安時代という共通点はあるものの、私の中で別々の世界だったものが、則光と清少納言を通して一つのイメージとしてできあがりしました。そして、この機会に懐かしい稲賀敬二先生訳の「枕草子」を読むこともできました。清少納言の経験に即した年代順で読んでみたところ、宮仕えを始めた頃の初々しい気分が、徐々に自信に変わっていく様子がよく分かりました。その陰には中宮定子が清少納言に気配りをしていたこともうかがわれます。マッコの則光でなく美男子系の斉信にときめく場面も面白いです。「自分はおばあちゃんで、髪が短くなり付け鬘をしている」と告白をしているのも可愛いですよ。まだ30歳そこそこなのに。(稲賀先生の訳はとてもおすすめです。

田辺聖子訳や桃尻語訳のように跳んだ訳がしてなくて原文に忠実だと思います。)書会ではレポートの課題があって大変ですが、書くことによっていろんな世界が広がってくるので、有難いことと思っています。

#### 参 考 文 献

「今昔物語集三」馬淵和夫他 小学館日本古典文学全集(昭和46年発行)

「枕草子」 松尾聰他 同 上

「現代語訳學燈文庫 枕草子」稲賀敬二 學燈社(2006年発行)